風と共に去らなかった『風と共に去りぬ』

森田　孟

「また，明日という日がある」(to-morrow is another day) は，マーガレット・ミッチェル (Margaret Mitchell, 1900-49) の『風と共に去りぬ』*Gone with the Wind* (1936) の最後の一文として有名である。スカーレット (Scarlett) が長年の錯覚から醒めて真の愛情に気付くのは，その愛の対象であるレット・バトラー (Rhett Butler) に決定的に去られる時であった。狼狽しながらも彼女は，しかし，「そんなことは皆，明日，タラで考えよう。そうすれば堪えられるだろう。明日，あの人を取り戻す方法を何か考えよう。とにかく，また明日という日があるのだから」と考えながら，レットに去られた悲痛に堪えようとする。

I'll think of it all to-morrow, at Tara. I can stand it then. To-morrow, I'll think of some way to get him back. After all, to-morrow is another day. (1042)[1)]

今は考えるのをよそう，もっと堪えられるようになってから，後で考えることにしよう，というのは，思うだに恐ろしいことや堪え難い不愉快に出逢うたびに，それを乗り切るスカーレットの得意の戦術で，この最後の場面に到るまでにも既に20回，彼女はそう考えてきたのだった。順にその箇所を挙げてみよう。

① 'I won't think of that now,' she said firmly. If I think of it now, it will upset me. There's no reason why things won't come out the way I want them — if he loves me. And I know he does!' (77)

② '... It's a nightmare. ... I mustn't think of it now, or I'll begin screaming in front of all these people. I can't think now. I'll think

later, when I can stand it — when I can't see his eyes.' (134)

③ She had learned to say, 'I won't think of this or that bothersome thought now. I'll think about it to-morrow.' (213)

④ She would think of Mother later. She must put her mother out of her mind now, else she would stumble stupidly like Gerald or sob monotonously like Wade. (408)

⑤ '.... I won't think about it now. I won't think of him or Mother or any of these awful things now. No, not till I can stand it. ...' (424)

⑥ 'I won't think of it now. I can't stand it now. I'll think of it later," she said aloud, turning her eyes away. (428)

⑦ 'I won't think about it now. I'll bother about it after I've married him. ...' (542)

⑧ 'I won't think of that now. I'll think of it later,' and she pushed the unwelcome idea into the back of her mind lest it shake her resolution. (544)

⑨ 'I won't think of it now,' she told herself and hurried her steps. (557)

⑩ 'I won't think of Tara now. I'll think of it later, when it won't hurt so much.' (591)

⑪ ... with ... a shrug and the repetition of her unfailing charm: 'I'll think of all this later.' (666)

⑫ After three drinks, she could always say to herself: 'I'll think

of these things to-morrow when I can stand them better.' (690)

⑬ 'Oh, I'll think of them later,' she decided, and pushed the thought into the lumber-room of her mind and shut the door upon it. (793)

⑭ She recovered enough to push the idea from the top of her mind and decide: 'I'll think about it all to-morrow.' (837)

⑮ ... she swallowed her anger as best she could, pushing it into the back of her mind to be thought of at some later date. She did not want to bother with anything unpleasant now. (875)

⑯ 'I won't think of it now,' she said desperately, burying her face in the pillow. 'I won't think of it now. I'll think of it later when I can stand it.' (933)

⑰ To-morrow — well, tomorrow was another day. To-morrow she would think of some excuse, some counter-accusations, some way of putting Rhett in the wrong. (937)

⑱ ... with her old defence against the world: 'I won't think of it now. I can't stand it if I do. I'll think of it to-morrow at Tara. To-morrow's another day.' (973)

⑲ She stood for a while, trying to summon up her old charm: 'I'll think of all this to-morrow when I can stand it better.' But the charm had lost its potency. (1024)

⑳ 'I won't think of it now,' she thought grimly, summoning up her old charm. 'I'll go crazy if I think about losing him now. I'll think of it to-morrow.' (1041)

① 「スカーレット・オハラは美しくはなかった」(Scarlett O'Hara was not beautiful,) でこの大作は始まる,「だが,一たび彼女の魅力に捉えられると,そんなことに気付く者は殆どいなかった」と。何を以って女性の美しさとするかは一口には言えまいが,大農園主の令嬢として何一つ不自由なく育って気品に溢れ,17インチ(43.18cm)という,その界隈三郡きっての細い腰回りに,十分成熟したふっくらとした胸の,美しい容姿で,近隣一帯の若者という若者を魅了していたというのだから,この16歳の少女は,確かに美しかったのだ。「美しくはなかった」で始まるとは心憎い。スカーレットを前にすると青年たちは,自分がどう思われているかが全く分らず,そのために心が乱れて(distraction)それが彼らにとって彼女の魅力だったという(17)。青年たちを一身に惹きつける幸福を満喫していたスカーレットであるが,彼女自身は近くの同じような大農園の貴公子アシュレー・ウィルクス(Ashley Wilkes)を恋し,彼からも愛されていると確信していて,彼と結婚するつもりでいた。

ところが,スカーレットも招待されている明日の,ウィルクス邸での晩の舞踏会で,彼は従妹のメラニー・ハミルトン(Melanie Hamilton)との婚約を発表するらしいという。スカーレットは気もそぞろで,自分がアシュレー・ウィルクス夫人になれないことになったらどうしようと心配する。彼が私を愛していてさえくれれば,私が望む通りにならないわけはないし,彼が私を愛していることは私が知っているのだから,と,今は悪いようになることなど考えないでおこう,と思うのが①である。優雅で行き届いている母親のエレン(Ellen)もこれまでスカーレットに,欲することと手に入れることとは二つの異なった事だということを話していなかったし,人生も彼女に,競走は最も早いものの勝になるわけではないことを教えていなかったのだ,と地の文は説明を付けている。

> Ellen had never told her that desire and attainment were two different matters; life had not taught her that the race was not to the swift. (77)

② アシュレーのメラニーとの結婚ですっかり誇りを傷つけられたスカーレットが,腹いせのように,アシュレーの妹の婚約者で,メラニーの兄のチャールズと電撃的に結婚した日のこと,彼女を見詰めているアシュレーの顔の表情を見てのスカーレットの思いである。悪夢だ,これは,と彼女は思ったものだが,彼女はそれから一ヵ月半余のうちに,胎児を宿した寡婦となってしまう。

南北戦争に従軍した夫が戦病死したのである。

③ 銃後のアトランタで，メラニーとその叔母の家で暮らしているスカーレットが，メラニーの留守中，こっそりと，アシュレーからのメラニー宛の書翰を盗み読みながら，自分の卑しい行為に対する気のとがめと戦う際のもの。

④ 出産直後のメラニーとその赤子を伴って，戦火のアトランタから実家のタラ農園にようやく帰り着いたスカーレットが，母親エレンの死を知った時である。これからスカーレットの苦闘が始まる。

⑤ タラ農園に帰り着いたスカーレットが，更に，父親の正気を失った状態に気付かされた時である。無一文から不屈の闘志で一代で大農園を築き上げた父親も，北軍の来襲と妻の死の衝撃が重なって正気を失ってしまい，妻のエレンの死さえ忘れてしまっている状態である。

The combined shock of the coming of the Yankees and her death had stunned him. (424)

⑥ 北軍に荒らされた近隣を見て回りながら，ウィルクス邸の焼け跡へ来たスカーレットが，ここでチャールズが夢中で自分の手を握ったのだった，アシュレーが花嫁と結婚したのだった，それなのに彼の息子や孫は，花嫁をこの邸へ迎えることは出来ないのだ，等々とつらいことを思いながら，そんなことを考えるのはとてもたまらないから，考えるのはよそう，と気を取り直すところである。

アトランタからタラまでの長旅を何とか乗り切ったスカーレットは，小さな子供をかかえた19歳の寡婦として（nineteen years old, a widow with a little child—420），一家の支柱にならなければならなくなる。明日の食物も殆ど無い状態で，彼女の頭脳は事態を，人間とは思えないような無情な明晰さで見つめるのだった。彼女は少女時代を，今や振り棄てて，新しい眼で物を見，一人前の女性となる。青春は去ったのだ。

... her hrain saw things with an inhuman clarity.

She was seeing things with new eyes for, somewhere along the long road to Tara, she had left her girlhood behind her. ... She was a woman now and youth was gone. (421-22)

⑦ 窮乏の中でタラを護るために税金の工面に頭を悩ますスカーレットが，富豪のレット・バトラーと結婚しようかと考える場面である。彼はかつて自分はどの女性よりもあなたを強く求めたし，長く待ってきた，と言ってくれた。

'I want you more than I have ever wanted any woman — and I've waited longer for you than I've ever waited for any woman.' (541)

だが，彼女はこの世の誰よりも彼を嫌ってきたのだ（...she hated Rhett as she hated no other person in all the world. 541)。レットは素直に愛情を表明するのを惜しんでスカーレットに誤解させ続けてきた。その強烈な個性と，あくの強さが，人間として未熟な気位の高いスカーレットの神経にさわるのだ。あれこれ考え悩み始めて彼女は，また，その考えを先に延ばそうとする。

⑧ 男性の実態が分らないスカーレットが，またあれこれ思い悩む時である。また子供が生まれるのは恐ろしいし，かと言って…と。そして自分の決意が揺れるのを恐れて，不愉快な考えは心の奥に押しやる。

⑨ レットを巧く籠絡して彼から借金をするためにアトランタへ出てきたスカーレットがレットの情婦だと噂される女性を通りで見かけた時のことで，自分の方がその女性より優れているし貞淑だと感じたかったが，そうはできなかった。己が計画が成功すれば彼女も同じ立場になり，同じ男から養われることになるのだ。スカーレットはこの不愉快な考えを追いやろうとする。

⑩ レットから金銭を得られずに憤怒に燃えてアトランタの街路を歩いていたスカーレットが昔なじみの，今は妹の許婚者であるフランク・ケネディ（Frank Kennedy）に偶然出逢い，タラのことを訊ねられた時である。ひたむきで一直線のスカーレットは，タラを護ることしか念頭になく，丁度，レットも苦境にあったのだが，彼から，卑屈を窘められて憤慨していた。

材木商として金持になっているフランクに目をつけたスカーレットは，狡猾な手段を弄して，この妹の婚約者を奪って彼と結婚する。一まずタラを護ることに成功するが，窮乏の苦痛が身に沁みた彼女は，金銭の奴隷のようになって，気の弱い夫を押しのけるようにしながら，自ら商売に乗り出す。夫から無理に任せてもらった工場の一つの経営に集中する。父親から受け継いでいた商

売上の本能が，必要に迫られて研きをかけられた。

... the shrewd trading instinct she had inherited was now sharpened by her needs. (665)

⑪ 嘘をついてまで機敏な事をやるあこぎな商売をしている今の自分を，もし母が生きていたらどう思うか，母のエレンがこうあって欲しいと願うような自分ではないと一瞬反省めいた思いに駆られたスカーレットが，溜息と共に (with a sigh that she was not as Ellen would like her to be, —666) 肩をすくめて例の呪文を繰り返す。

⑫ 周囲から顰蹙を買い，身近な人々から心配されながら，スカーレットは敗戦後の南部の都市アトランタで，激しく生き凌いでゆく。いつのまにかブランデーを飲むことを覚えた彼女は，貧乏の恐怖，北部人への恐れ，タラへの郷愁，アシュレーへの思いなどに心を乱されると (torn with fears of poverty, dreading the Yankees, homesick for Tara and yearning for Ashley —690) ブランデーを飲みながら，こんなことはもっとよく耐えられるようになってから考えようとする。この後間もなく彼女は父を失う。

⑬ 囚人を足枷のまま借り出して労働させるという方法が，戦後処理の中で行われていて，スカーレットも人件費節約のためにこれを利用する。彼女の工場で雇った工場監督は働かせている囚人たちを冷酷に扱う。如何に金銭の欲望に憑かれているとはいえ，彼女の良心は平静ではいられない。囚人たちは法を犯して捕えられた人々だからああいう目に会っても仕方なかろう，などとも考えながら煩悶するが，そういう思いも心の物置部屋に押し込んで扉を閉ざす。あとで考えようと。

⑭ 黒人奴隷が何の準備もないままに突然開放されて巷に溢れ，北部政府の圧迫の下で物情騒然たるアトランタの街中で，相変らず奮闘し続けるスカーレットは，ある夜，工場からの帰途，黒人の酔漢に襲われ，危うく難を逃がれる。スカーレットの危難も弾みの一つとなって，忍耐し切れなくなった南部の白人男性たちは行動を起そうとし，遂に官憲に襲撃され，スカーレットの夫は殺され，アシュレーも重傷を負う。スカーレットは再び寡婦となり，夫に優しくなかったことなどへの反省もあって，戦時中の，あるいは戦後の母親の死後

の，タラでの光景などが恐しい夢となって，彼女を夜な夜な悩ませる。それをレットは，冷静に，彼女の実態を発き立てて，彼女の恐怖心を消し去ってやろうとする。いじめずにはおれない人を誰でもいじめるように生まれついているのがあなただ。この世は強い者がいじめ，弱い者はいじめられるように出来ているのだと。

But you were born to bully anyone who'll let you do it. The strong were made to bully and the weak to knuckle under. (836)

彼女には全く意地悪に響くレットの言葉だが，彼女は，いやな事はまた後日考えるようにしようとする。

⑮ スカーレットは遂にレットと結婚する。レットは彼女を，湯水のように金銭を使って十分に楽しませる。周囲から顰蹙を買うような大豪邸を作ってやり，好き勝手なことをやらせて面白がっているが，スカーレットは我儘一杯に振るまい，レットもからかっては彼女の癇癪を引き出す。気位の高い彼女はレットに膝を屈しさせたいが，そんなことは彼も頑としてしない。またスカーレットは不愉快なことは考えまいとする。

⑯ アシュレーの誕生日のパーティが開かれる前にスカーレットは，彼の働いている工場に出かける。この工場は，スカーレットが彼に譲渡したものである。アシュレーが帳簿を調べている事務所を訪ねて彼と二人きりになると，スカーレットは嬉しくてたまらない。依然として素晴しい輝かしい恋人であり，生命よりも彼を愛していた (... still her bright, shining darling, and she loved him better than life. 925)からである。感動して涙を流し，傷ついて当惑した子供のように (like a hurt bewildered child. 930) 立って見詰めるスカーレットを，アシュレーはそっと抱擁する。情熱も緊張もなく，愛されている友人としてアシュレーの腕に抱かれているのは心地よかった。

Ah, it was good to be in his arms, without passion, without tenseness, to be there as a loved friend. (930-31)

人から非難されるようなことではない筈だったが，十分に誤解されうる場面であった。そこを，アシュレーの妹で，スカーレットに敵意を抱くインディアたちに目撃されてしまう。スカーレットは恥ずかしさと恐怖から家へ逃げ帰るが，たちまち，人々に知られてしまうだろうと居たたまれなくなる。ただでさ

え，周囲の顰蹙を買い，古い友人たちの感情を害してしまっている彼女のことであるから，話は尾鰭が付いて，さぞかし皆から不道徳・不貞な女性として，今晩のアシュレーの誕生パーティでは，憎悪・非難の目で見られることだろう。とにかく今晩は，家に閉じ込もっていて，明日の朝までには何とか筋の通る言い訳を考え出そう，今は何も考えまい，とするのが ⑯ である。

夫レットの敢然たる適切な処置で，スカーレットは夫に連れられて正々堂々とパーティに出席させられる。メラニーの公正で毅然とした優しい態度・振舞いによってスカーレットは護られ，とにかく，公然と辱しめられるようなこともなく，その場を切り抜けられる。

スカーレットの哀れな卑小さと，メラニーの実に美事な偉大さが浮き彫りになるところで，二人の対比が鮮やかに描出されるが，スカーレットはしかし，憎めない可憐な女性としても，十分造型されている。

⑰ 殆どメラニーのお陰で，醜聞を食い止められて帰宅したスカーレットが，自室に入ってほっとした時の思いである。アシュレーの誕生日祝いのパーティが終ると，レットはスカーレットを一人で先に馬車で帰した。彼はそのまま姿を現わさない。飽くまでも利己的で我儘な彼女は，レットの思いやりも判らず，彼を責め立てることさえ考えている。

スカーレットとアシュレーの二人は，メラニーが細っそりとした肩を憤然と身構え，ガラスのような床を横切ってきてスカーレットの腕にすっと腕を滑り込ませて，好奇心と悪意に充ちて密かに敵意を抱いている人々に真向った時のメラニーの声に含まれていた愛情と明らさまな信頼によって，救われたのだった。

... they had both been saved by the indignant squaring of Melanie's thin shoulders and the love and outspoken trust which had been in her voice as she crossed the glassy floor to slip her arm through Scarlett's and face the curious, malicious, covertly hostile crowd. (937-38)

この恐しい晩，メラニーは絶えずスカーレットのそばにくっついていて，醜聞を食い止めた。人々は幾らか興ざめた思いで戸惑っていたが礼儀正しくしていたのだ。

People had been a bit cool, somewhat bewildered, but they bad been polite. (938)

それなのに罰当りなスカーレットは，メラニーの盲目的な信頼によって救われたことを殊更いまいましく思っている。

⑱ スカーレットを激しく愛しているレットではあるが，彼女の心が常にアシュレーに向かっていることには耐え難く，アシュレーの誕生日のパーティの終った夜，彼はスカーレットを強烈に愛撫する。スカーレットも目眩めく恍惚感に翻弄された。が，翌朝からレットは二日間も家をあける。口論の末，レットは，溺愛している娘のボニーを連れて，自分の母親の所へ出かけて三ヵ月余，音沙汰無しのまま過ごす。そして突然帰ってくるが，その時，スカーレットは，レットとの間の二人目の子供を身籠っていた。スカーレットはレットを常に自分にかしづかせたい我儘な妻だが，レットはそれを判っていながら彼女の思うようになってやらない。17歳も年下のスカーレットなのだから，レットも，真底彼女が可愛いかったら，徹底的に可愛いがってやればよさそうなものだが，そこは夫婦なので，常に一方だけが譲歩し続けるわけにはゆかなかったのであろう。スカーレットとレットは，いつも行き違い続ける。今度も，感情のひどい行き違いから，レットはスカーレットを怒らせる。階段の上でスカーレットは夫につかみかかろうとし，レットが驚いて一寸身をよけたために，彼女は階段を転げ落ち，そのために流産する。レットは激しく自分自身を責め続けるが，後の祭りである。

一ヵ月後，スカーレットは，病後の身を養うためにタラに帰ることにする。傷ついた心と病み衰えた身を，タラで癒やそうとして。また明日という日がある，という，世間から己が身を護る例の言葉と共に色々な思い悩みを心の奥に押し込みながら。

..., pressing her worries into the back of her mind with her old defence against the world: (973)

⑲ メラニーが流産して他界するに及んでスカーレットはようやく目が醒める。自分がメラニーを如何に愛し，彼女を頼りにしていたか，また，アシュレーの本当の姿を自分が如何に見ていなかったかに気付く。自分の愚かさに思い到った苦しさに耐え難く，例の呪文を呼び出そうとするが，それも効果がない。メラニーを看取った苦しみから逃れて我が家に帰りながら，彼女は気付く。夢の中で求め続けてきた安息所，霧の中で常に隠れて見えなかった暖い安

全な場所を見い出したことに。それはアシュレーではなく，レットだったのだと。

Now she knew the haven she had sought in dreams, the place of warm safety which had always been hidden from her in the mist. It was not Ashley—oh, never Ashley! ... It was Rhett— (1026-27)

しかしそれは手遅れだったのだ。

メラニーの死は，レットにも決定的な打撃であった。最愛の娘ボニーを，溺愛の故に既に亡くして真底打ちのめされていたレットなのである。自分の知る限り唯一の完全に優しい人だった，実に立派な婦人だった，とレットは述懐する。

'She was the only completely kind person I ever knew'. ... 'A very great lady.' (1030)

スカーレットもレットの目を通して，逝けるものに気付く。一人の女性がではなく，一つの伝説が——南部が，戦時中にはその人に頼って家を築き，敗戦時にはその人の誇りと愛情深い両腕を頼ってきた，優しくて控え目でありながら鋼鉄の背骨をもった女性たちが失われたことになったのだ，と。

She was seeing through Rhett's eyes the passing, not of a woman but a legend — the gentle, self-effacing but steel-spined women on whom the South had builded its house in war and to whose proud and loving arms it had returned in defeat. (1030)

メラニーの死を誠に言い得て妙，というべき箇処である。

メラニーの死は，レットのスカーレットへの愛情を完全に消し去った。スカーレットのレットへの愛を確固たるものにしたのと同様に。レットの言うように，彼らは食い違ってばかりいたのだ(we've been at cross purpose, 1036)。スカーレットにもようやく，人の心が理解できるようになる。今になって初めて彼女には，自分も同じだったのに，レットの，拒絶されることを恐れる余り，自分の愛情を素直に認められない鋭敏な用心深さ，頑固な誇りが理解できたのである。

And she could understand his shrewd caginess, so like her own, his obstinate pride that kept him from admitting his love for fear of a

rebuff. (1036-37)

だが，時すでに遅しで，レットの愛は完全に冷めていた。レットの言う通り，最も消え去ることのない愛でさえも冷め得るのだ（... even the most deathless love could wear out.—1034)。何にでも手遅れということはある。スカーレットは目が醒めるのが遅すぎた。それ程私を愛していたことがあるなら，私のためにまだ何か残っているものがあるだろう，と言い迫るスカーレットにも，レットは，君の最も嫌いなもの二つ，憐憫と奇妙な親切という感情だけだと言うのみである。

'Rhett, if you once loved me so much, there must be something left for me!'

'Out of it all I find only two things that remain and they are the two things you hate the most—pity and an odd feeling of kindness.' (1038)

今になってどれ程「愛している」と言っても，これまたレットの言うように，スカーレットの不幸（That's your misfortune. 1038）でしかない。君は常に黄金よりもぴかぴか光るものの方に惹きつけられるだろうと思う（I think you'll always be more attracted by glister than by gold. 1040）と言うレットは，壊れたものは壊れたもの（What is broken is broken. 同）と言い，去ってゆく。スカーレットは愛する男性を二人とも理解することが出来ずに二人共失ってしまったのだった。ようやく手探りするように分ったのだ。もしアシュレーを理解していたら彼を愛したりはしなかったろうし，レットを理解していたら，彼を失ってしまうようなことはなかったろうと。

Now, she had a fumbling knowledge that, had she ever understood Ashley, she would never have loved him; had she ever understood Rhett, she would never have lost him. (1041)

淋しさや苦痛に苛まれながら，彼女は，今はもうこれ以上は考えないでおこう，タラへ帰ってから考えようと思う。それが ㉑ である。そう思った直後声に出してその思いを口に出す。（声に出した言葉も数えれば，もう一回ふえるが，この時のは一度と見なしておこう。）

そして最後に，もう一度気を取り直して，スカーレットは持ち前の闘志を騒

き立てる。これまで，この人を，と決意して手に入らなかった男性はいなかったのだから，レットもきっと取り戻せる，取り戻してみせる，と。

She could get Rhett back. She knew she could. There had never been a man she couldn't get, once she set her mind upon him.

(1042)

とにかく，明日という日がまだあるのだから，明日タラへ帰って考えようと，スカーレットが最後にもう一度，心に思いきめるところで，この作品は終る。

全五部，63章から成る1040ページに垂んとする大作中，21回にわたって，主人公の殆ど同一の思いが反復されているわけである。考えなければならないことは考えなければならない。だが，幾ら考えてもその時解決出来ないこと，思うだに苦痛なことを，くよくよと思い悩んでも仕方のないことである。生きている限り，また明日という日が，確かにあるのだから。

スカーレットの，この考え方（ということは生き方ということになる）が現われるのは，第Ⅰ部で2回，第Ⅱ部で1回，第Ⅲ部で3回，第Ⅳ部で8回，第Ⅴ部で7回，でいずれも，彼女の＜愛情＞に関わる悩みの際である。アシュレーに主として関わるものは，①，②，③，⑥，⑫ など前半の方に，レットに主として関わるのは，⑦，⑧，⑨，⑭，⑮，⑰，⑱，⑲，⑳ と，最後，など後半の方に，その他，両親やタラへの思いに関して④，⑤，⑥，⑩，⑪ などであり，⑬は，囚人たちへの憐れみと自分の良心に関わるものである。⑯ は，アシュレーと自分との名誉に関わるものだが，これらはいずれも，スカーレットの＜自己愛＞が根底になっていることが看て取れて，如何にも，この女主人公に相応しい，と思わせられよう。

スカーレットはある時，フォンテイン老婦人（Grandma Fontaine）から教わったことがある。「わめくな。笑って時を待て」だと。我々はそうして生き凌いで来たのだと。

"Don't holler — smile and bide your time." (721)

老婦人は更にこう言ってスカーレットに教える。避け難いことには頭を下げればいい。私たちは小麦ではなく蕎麦なのだ，嵐がやってくると実った小麦は乾いているので風に耐えられないが，蕎麦は実っても水分があるのでしなって風に耐えられる。風が吹き過ぎたら，また前と同じようにすっくと立って強く

なる。私たちも頑丈ではないのだから，困難が生じたら，避け難い事には何も言わずに頭を下げて，仕事をしながら笑って時を待つのだよ，それが生き残る秘訣なのさ，と。

We bow to the inevitable. We're not wheat, we're buckwheat! When a storm comes along it flattens ripe wheat because it's dry and can't bend with the wind. But ripe buckwheat's got sap in it and it bends. And when the wind has passed, it springs up almost as straight and strong as before .... When trouble comes we bow to the inevitable without any mouthing, and we work and we smile and we bide our time. ... That, my child, is the secret of the survival. (722)

この老婦人はスカーレットに，かつてこうも諭したことがある。女性が，身に振りかかりうる最悪の事態に直面するのは大変不幸なことだ，と。何故なら，最悪を経験すると，もう何物をも恐れなくなるからで，女性が何かを恐れなくなることは，大変，具合の悪いことだからだ，と。物を恐れなくなった女性にはどこか不自然なところが現われるのだから，いつも恐れるものを何かとっておきなさい。愛するものを何かとっておくようにするのと同じように，と。

'Child, it's a very bad thing for a woman to face the worst that can happen to her, because after she's faced the worst she can't ever really fear anything again. And it's very bad for a woman not to be afraid of something. ...' (454)

'... there's something unnatural about a woman who isn't afraid. ... Scarlett, always save something to fear — even as you save something to love. ...' (455)

戦後の窮乏の中で，スカーレットは，最悪を経験して飢えと飢えの悪夢以外は何も恐れない女性になった。人生も，母も，愛の喪失も，世間の評判も。

She had become ... a woman who had seen the worst and so had nothing else to fear. Not life nor Mother nor loss of love nor public opinion. Only hunger and her nightmare dream of hunger could make her afraid. (543)

とはあるが，フォンティン老婦人に，再起する才覚 (the gumption to rise up again) を教わった (722) スカーレットは，飢えと飢えの悪夢からすっか

り開放されて，どうやらまた，恐れるものはまだとってある女性になったのではなかろうか。最後の，不屈の闘志を騒き立てながら，また明日があると，気を取り直したところを見るとそう言ってよさそうである。恐れるもののなくなった者に，明日への期待はないからである。また明日が，また明日が，と，この女主人公は，今後もひたむきに生き凌いで行くであろう。三度結婚して，それぞれの夫との間に一人ずつ，計三人の子供を産み，そのうちの一人に先立たれ，一度流産し，二人の夫に死なれ，一人の夫に今また去られてしまおうとしているスカーレットは，この時まだ28歳である。

彼女の先は長い。読者には甚だ気にかかる結末であり，また，それ程に，この作品は迫真力に富む筆致でスカーレットを描き上げてきたのであった。その後，56年経った1991年に，この作品の続編『スカーレット』*Scarlett*[2] が，大作で，別の作者によって書かれたことほど，『風と共に去りぬ』が<名作>であることを証する出来事はあるまいと思われる。確かにまた，明日という日はあったのである。

ミッチェルは，『風と共に去りぬ』を当初（原稿は無題のまま，出版社に任せたのだが）『また明日という日がある』（*Tomorrow is Another Day*）にしようとしていたが，最後になって現行の題にし，出版社側も賛成したとされている[3]。21 回も作中で巧妙に反復されるスカーレットの想いであり，締め括りの一文でもあるから，当初の標題は成る程と思われるが，現行の題に最後になって変更したのは，誠に美事な作家魂だったと言うべきだろう。「風と共に去りぬ」という句は，この作中，ただ一度だけ現われるものなのである。第Ⅲ部の真中辺り，第24章で。

戦火のアトランタから，レットが用意してくれた痩せ馬の引くぼろ馬車を駆り立てて，スカーレットが，出産直後のメラニー母子と黒人の少女召使いと共に，ようやくタラ農園の近くにまで辿り着いた時である。疲れ切った頭でスカーレットは考える。タラはまだ大丈夫だろうか。それともタラもまた，ジョージアを吹きまくった風と共に去ってしまったのだろうか，と。

Was Tara still standing? Or was Tara also gone with the wind which had swept through Georgia? (398)（下線は本稿の筆者）

作中で特別目立つ語句を作品の標題にするよりは，最も目立たないものを，それでいて目立つもの同様に，作品の本質に最も深く関わるものを選んでその作品の標題にする方が，遙かに気が利いているだろう。しかもこの語句は，作

中でも，疑問文の文脈で使われていた。「風と共に去りぬ」は，実は，反語なのである。ジョージアもタラも，そしてスカーレットは勿論のこと，<風と共に去>ってはしまわなかったのである。

南北戦争直前から，南部敗戦後の再建時代へかけて，12年間の激動期を16歳から28歳まで激しくひたむきに生きたヒロインを描いて，『風と共に去りぬ』は，出版後半世紀余の今も，風と共に去るどころではない。アレグザンドラ・リプリーの筆によって，56年後に，風と共に帰ってくる運命であった。

注

1) 本稿の使用テクストは Margaret Mitchell, *Gone with the Wind*(MacMillan London Limited : London & Basingstoke, 1936, rep., 1985)，括弧内の数字はその引用，言及ページ。

2) Alexandra Ripley, *Scarlett : The Sequel to Margaret Mitchell's* Gone with the Wind (Warner Book : New York, 1991)。全4部89章から成る823ページの大作。

3) Richard Harwell, ed., *Margaret Mitchell's* Gone with the Wind *Letters* 1936-1949 (Sidgwick & Jackson : London, 1987), xxvii.

ミッチェルのこの書翰集は，『風と共に去りぬ』の出版直前から，彼女の死の一カ月位前までに彼女が書いた，この作品に関わりのある手紙の選集で，総数324通が収録されている。

尚，"gone with the wind"は，19世紀末の英国の詩人Ernest Dowson (1867-1900) の詩 "Non Sum Qualis Eram Bonae sub Regno Cynarae" (通称 "Cynara") の第3連1行目にある詩句である。

"I have forgot much, Cynara ! gone with the wind,"

作者はここから，十中八九 (in all probability) 作品のタイトルを採ったのであろう，とは，『風と共に去りぬ』をその年 (1936年) の最上の小説に選んだ Dr. William Lyon Phelps の推測であり，彼はまた，Dowson のこの詩句は，James Clarence Mangan の詩「風の中で去りぬ」"Gone in the wind" から得たのかも知れぬと示唆している。Mangan のその詩の第1連は次のようになっている。

Solomon ! where is thy throne ? It is gone in the wind.
Babylon ! where is thy might ? It is gone in the wind.
Like the swift shadows of Noon, like the dreams of the Blind,
Vanish the glories and pomps of the earth in the wind.

(ソロモン！　汝の王座はいずこに？　そは風の中にて去りぬ。
バビロン！　汝の勢力はいずこに？　そは風の中にて去りぬ。
正午の素早き影の如く，盲い人の夢の如く，
消え失せてゆく　地上の栄光と誇示は風の中に。)

上記 Harvel 編書翰集p. 113参照。